

一八八五年十二月二十三日(水)

コシポールの別荘でナレンドラはじめ信者たちと共に

恵みの海の聖ラーマクリシュナ——校長、ニランジャン、バヴァナート

聖ラーマクリシュナは、信者たちといっしょにコシポールに住んでいらつしやる。お病気は非常に重いのだが——お心にかけることは唯一つ——信者たちをどうしたら真の幸福に導いてやれるかということ。一日中、誰彼だれかれと信者たちのことを考えていらつしやる。

去る十二月十一日、金曜日、オグロハヨシニ十七日、白分五日目の日に、タクールはシャームプクルの家からこのコシポールの美しい別荘(別荘)にお移りになった。今日で十二日になる。

このころには、タクールの信者たちはほとんど集まった。西暦一八八一年から信者たちはタクールのもとに集まってきた。一八八四年の暮れにはシャシー(後のラーマクリシュナーナンダ師)とシャラト(後のサーラーダーナンダ師)がタクールにお会いした。大学の試験がすんで一八八五年の中頃から、彼等は毎日のように来ている。一八八四年の九月、スター劇場(シテ)のギリシュ・ゴーシュ氏がタクールにお会いしたが、三ヶ月後、つまり十二月のはじめころから、彼もまたタクールのもとに始終出入りするよう

なった。一八八四年十二月の終りころ、サーラダ(後のトリグナタイターナンダ師)が南神村ドフキキヤンシヨでタクールにお会いした。スポドゥ(後のスポダーナンダ師)とクシーロドは一八八五年八月にタクールに始めてお会いした。

今日の朝は愛の洪水だ。タクールはニランジャンにおつしやる——「お前はわたしのお父さんだ。ヒザの上に坐るよ」(訳註6、291ページ)カリパダの胸にさわって——「(霊に)目覚めろ！」そして、彼のアゴをいとおしそうになぜながらおつしやる——「心の底から神を求めている人か、まじめに毎日勤行をしている人は、きつと此処に来ることになっている」

朝方、二人の婦人信者にも大へんなお恵みを下さった。三昧に入られて、彼女たちの胸を足でさわられたのである。二人は涙をポロポロ流して、一人は声をあげて泣きだした。——「まあ、何という慈悲深い方でしょう！」まさに、愛の洪水である！ シンティ(訳註7)のゴパールをも祝福してやりたいから

(訳註1) コシポールの別荘——五エーカー(二万坪)の土地に果樹や花の樹が沢山植えられていて、その中に美しい家が建っている。一階に三部屋、二階に二部屋あり、タクールは二階中央の広間をお使いになり、左隣の部屋は看病する人たちが使う。広間の右隣にはバルコニーがあり、タクールはときどきそこへ出て坐ったり歩いたりなされる。タクールの居室の真下にある広間と右の部屋は信者たちが使い、左隣の部屋は大聖母(ホーリー・マザー)の居間にあてられている。広い敷地には数個の離れ屋があり、二つの池、散歩道があった。若い信者たちは次々とコシポールに来て住みついている——タクールのお世話をするためである。ほとんどの者はまだ、ときどき家に往来している。家族を持った信者たちは毎日のように通って来て、夜おそくまでいる。

と、「ゴパールを呼んで連れてこい」とおっしゃった。

今日は水曜日、ポウシユ九日、オグロハヨン黒分二日目。一八八五年十二月二十三日、夕方。タクルは宇宙の大実母を想っていらつしやる。

やがてタクルは、何とも言いようのない甘いお声で、一、二の信者たちと話をはじめられた。部屋にはカーリー、チュニラル、校長、ナヴァゴパール、シャシー、ニランジャンたち信者がいる。

聖ラーマクリシユナ（校長に）腰掛けを一つ買ってきてくれないか——ここ（タクルのこと）のためだね。いくらくらいだろうね？」

校長「はあ、二タカから三タカくらいのものでございましょう」

聖ラーマクリシユナ「沐浴用の低い座椅子が十二アナくらいなのに、腰掛けがどうしてそんなにするんだらうね？」

校長「そんなに高くはないと思いますが……。そのくらいで収おさまるでしょう！」

聖ラーマクリシユナ「そうだ、明日はまた木曜日でパールベラ（訳註）、縁起が悪いじゃないか。お前、三時前に来られないかい？」

校長「はい、そういたします」

〔タクル、聖ラーマクリシユナはアヴァターラか？——病氣の秘密な目的〕

聖ラーマクリシユナ「（校長に）——ねえ、この病氣はいつ治るんだらうね？」

校長「かなりひどいようでございますから、——日数はかかりましようけれど……」

聖ラーマクリシユナ「何日くらい？」

校長「五、六カ月はかかるのでは……」

タクールは幼い子供のようにガマンができなくなつて——「ナンだつて？ どうして？」

校長「はい、その、すっかりよくなるには、と……」

聖ラーマクリシユナ「だからさ。ねえ、こんなに神々しい姿を見たり、法悦境ハイヴアや三昧に入ったりするの！ どうしてこんな病氣になつたんだらうね？」

校長「お苦しいのはよくわかりますが……。これには深い目的わけがあるのだと思います」

聖ラーマクリシユナ「どんなワケさ？」

校長「あなた様の境地がお変わりになるのです。——無形の神の方に向かつていらつしやるのです。明知の私々までも無くそうとしていらつしやるのです」

聖ラーマクリシユナ「ウン。人を導くことも、どうやら終わるらしくて——もう何も言えなくなつ

(訳註2) シンティイのゴボール——ゴボール・チャンドラ・ゴーシュ(1888～1909)、年長のゴボールとも呼ばれ、この時57才。後のスワミ・アドヴァイターナンダ。

(訳註3) 木曜日の午後のことを、パールベラパールベラと言うが、ベンガル地方では木曜日の午後はどこかに出発するのは縁起が悪いとされているので、タクールはここに三時前に着くように午前中の出発を促したのである。

てきた。何もかもラーマに見える。ときどき、この先、誰に教えなけりやならないんだろう？　と思うことがあるよ。まあ、見てごらんよ——この家を借りてから、どんなにいろんな信者たちが来ることか——。

クリシユナブラサンナ・センヤシヤシヤダルのように看板サインボードなんか立てることはない——何時から講演レクチャーがあります！　なんて」（タクールと校長笑う）

校長「それからもう一つの目的は、人びとをフルイにかけることです。五年苦行しても達せられない境地に、ここへ来て数日の間に信者たちは達しております。修行チャータナの点においても、愛プレーマと信仰バクティにおいても——」

聖ラーマクリシユナ「ウーン、そりやたしかだねえ！　けど、ニランジャンは家に帰ったりする。（ニランジャンに）——お前、言ってみろ、どんなふうに思っているんだ？」

ニランジャン「はい。以前には、好きグという程度でしたけれど——でも今は、あなた様なしには生きていかれません！」

校長「私は先日、この青年たちが実にすぐれた人たちだということをはつきり悟りました！」

聖ラーマクリシユナ「どこで？」

校長「はい、シャームブクルの家で、隅の方に立って皆の様子を見ておりました。そして、この青年たちの一人一人が、どれほどの障害を乗り越えてあの家に来ているかということが、しみじみわかったのでございます——あなた様にお仕えるために」

〔三昧境——すばらしい境地——無形の神——内輪の信者の選別〕

校長の話聞きながら、タクルは前三昧になられた。しばらくの静寂——そして入三昧！

恍惚が退くと、タクルは校長におっしゃった——「見たよ、形ある神がみな、形を無くして行くのを！ もっともっと今見たことを聞かせてやりたいが、それが言えないんだよ。

そうか、あの形なき神に向かつて行く——あれは、わたしがそうやっていくためだろうか。どう思う？」

校長（驚いて）——「そうかも知れません！」

聖ラーマクリシユナ「今でも、その無相のサッチダーナンダが見えているんだよ！……でも、大へんな苦勞をして気分を抑えているんだ。

人を選ぶとお前は言ったが、その通りだよ。わたしがこの病気になったことで、誰が内輪の人か、誰が外の人かわかってくる。世間から離れてここへ来て住んでいる人たちは、内輪の人だ。

時たまた来て、『お加減はいかがですか？』と聞いていくのは外の人だ。
バヴァナートの様子を見たかい？ シヤームプクルに花ムコミたいに着飾ってやってきた。『いか

（訳註4）ベンガル語原典のコタムリトには、……や*…*などの記述が数ヶ所見られるが、これは著者が読者に伝えることをためらった内容だと言われている。ここもそういった内容が隠されていると思われる。

がですか?』と聞いて、その後一度も顔を見せない! (ナレンドラがバヴァナートと仲良しだったので) ナレンドラのためにわたしはあんな態度をとってきたんだが、バヴァナートに対しては心が向かないんだ」

タクルの口からあふれ出た甘露の言葉——聖ラーマクリシュナは何者?——告白

アーフス トヴァーム リシャヤハ サルヴェー デーヴァアルシル ナーラダス タター

アシトー デーヴァアロー ヴァーサハ スヴァヤン チャイヴァ プラヴィーシ メー

『ナーラダ アシタ デーヴァアラ そしてヴィヤーサ等の大聖者たちは皆

あなたに關するこの眞実を認めました。そして今、あなた自身がそれを宣言された』

——ギーター10・13——

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——あの御方が信者のために人間の体をとつてこの世に来なさる場合、信者たちもいっしょに従つて来るんだよ。そのなかには内輪の人になる人もあり、外まわりの人になる人もある。またある人達は必要な物質をくれる役目にまわる。

十か十一の頃、郷里でヴィシヤラクシ女神にお詣りに行こうとして草ッ原を横切つてるとき、初めてこの状態(靈的經驗)になった。何ともすばらしい光景だったよ!——外の意識がすっかり無くなつていた!

二十二、三のころ、南神村ドフキキシヨルのカーリー堂で、『お前、アクシヤラになるか?』という声をきいた。

——アクシヤラって何のことだかわからない！ ハラダリに聞いたたら、『クシヤラが個靈ソウワートマン（普通の人間）のことで、アクシヤラというのは至上我パラマートマンのことだ』と言った。

寺で献灯アキラテイの時間がくると、クティの屋根根に上がつては大声で叫んだものさ——『オーイ、どこかにいる信者たちーイ、こつちイ来ーい！ 俗人どもにとりまかれて、わたしは死にそうだよーッ！』イングリツシユマン（英国式の教育を受けた人たちに話したら、あいつらは、『それはみんな、心の迷いだよ！』と言った。だから、それからは静かにしていた。でも今になつてみたら、それがみんなホントになつているじゃないか！ 信者たちもみんな集まつてきている！

それから、世話をしてくれる人を五人見たよ。最初はシエジヨさん（マトゥール氏）、次がシャンブー・マリツク——彼には会つたことがなかつたんだが、半三昧のとき、色の白い頭に小さい帽子をのつけた人を見た。それからだいぶ経つてシャンブーに会つたら、そのことを思い出した。——これが、あの半三昧のとき見た人だ！と。あとの三人の世話人は、まだハッキリしない。でもみんな、肌の色の白い人たちだ。スレンドラが、そのうちの一人じゃないかという感じがしている。

あの境地になつたときは、わたしとそっくりな人がわたしのなかに入つてきて、イダー、ピンガラー、スシユムナーの管をいやというほど揺さぶつた！ 六つのチャクラの蓮を一つ一つ舌でねぶつていく。すると下を向いている蓮の花が上を向いて立つ。最後にサハスラーの蓮がすっかり開くんだ。

どんな人がここにやつてくるか、前もつて見えたものさ！ この目で——半三昧でじゃなく——チャイタニヤデーブラ様のサンキールタンが、パニヤン樹のところからバクル樹の方へ行列していくのを見た。

そんなふうにしてバララームも見たし、お前も見たようだった。チュニ(チュニラル)とお前は、ここに始終出入りしていることで目覚めてきたんだよ。シャシーとシャラトは、わたしの見たところによると、イエス・キリストのところに行った人だ。

パニヤン樹の下に、男の子が一人いるのを見た。フリダイに話すと、『じゃあ、あなたに子供が一人できるということですよ』と言う。『わたしにとっては、女はみな母親だ！ わたしに子供ができる筈がないだろう？』と言っておいたが、あの子はラカールだったよ。

マーに頼んだよ——^(訳註5) こういう境地にしておくのなら、誰か一人、金持ちをよこしておくれ——そうしたら^(原典註) シェジヨさんが来て、十四年も世話してくれた。ほんとにいろいろしてくれた！ 別に倉庫をこさえてくれたり——サードウたちにサービスするためのね。馬車やカゴも、何でも頼めばすぐ用立ててくれた。バラモンの尼さん(ヨーゲーシユワリー)は彼のことを、プラタブ・ルドラだと言った。

(訳註、プラタブ・ルドラ——オリッサの王でチャイタニヤの熱心な信者。師に奉仕した)

ヴィジャイは、この姿(タクルの姿)を見たそうだよ。これはどう思う？ ヴィジャイは、『今こゝであなたに触っているように、そのときもあなたに触りましたよ』と言っている。

ノト(ラトウ)は、全部で三十一人の信者がいると勘定している。あんまり多くはないね。でもヴィジャイとケダルを通して、あと何人かが信者になろうとしている。

これも半三昧のとき見たんだが、最後にわたしはパヤス(乳粥)を食べていかななくてはならない！

この病気になるってから、家内(信者にとっては大聖母)がパヤスをつくって食べさせてくれたとき、泣

いたよ——『これがパヤスを食べるといふ意味なのか！こんなに痛みがあるといふのに……』と言つて」(訳註——パヤス(乳粥)は食後のお菓子^{スィーツ}として出されることが多く、平素なら楽しみの料理)

(訳註5) シェジョさん——シェジョは三番目のといふ意味で、ラースマニ家の三女、カルナーマイーの婿^{むこ}マトゥール氏を指す。カルナーマイーの死後、四女のジャガダンバの婿^{むこ}となった。

(原典註) マトゥール氏は一八五八年から一八七一年までタクールに奉仕し、一八七一年七月十四日に亡くなった。

(訳註6) カリパダ・ゴーシユ(1891~1905)——カリパダは大酒飲みで知られており、信者たちのあいだでは、同じく酒飲みで自分勝手だったギリシユとあわせて、チャイタニヤによって改心させられた悪党の名をとって、ジャガイ、マダイ^{ジャガイ}と呼ばれていたが、この十二月二十三日を境に酒を飲むことをやめたばかりか、世俗のことに對する興味まで失い、カリパダは人が変わったのだった。その劇的な変化は聖ラーマクリシユナの信者たちに大きな感銘を与えることになった。カリパダが初めてタクールに会ったのは一八八四年で、友人のギリシユ・ゴーシユに連れられてやって来た。聖ラーマクリシユナはカリパダを見て、「十二年間、妻を苦しめた男がやって来た」と言つた。^{おぼ}遡ること十二年前、家族に金を渡さず大酒飲みだったカリパダの性分を直してもらおうと、妻のヴィシユヌ・プリアンギニー・デーヴィーは聖ラーマクリシユナを訪ねた。タクールはホーリー・マザーのところにおやりになり、ホーリー・マザーはベルの葉に聖ラーマクリシユナの御名を書いて渡し、師の御名を唱えるよう告げられた。それをヴィシユヌ・プリアンギニー・デーヴィーはずつと守り続けた。初めて会った日に、タクールはカリパダに「お前、何かほしいものがあるかい？」と尋ねた。カリパダは、「酒を少しばかり……」と答え、タクールは、「ここにあるのはとても強い酒だ。皆が耐えられるわけではない。これを一度でも味わつたら、他の酒なんか飲めなくなるよ。お前、この酒を飲む準備が出来ているかい？」と尋ねた。カリパダは少し考えて、「はい、私を一生酔わせて

くれる酒をください」と言う。とタクールは彼に触れた。とたん彼は泣き出した。次にタクールに会ったときには大胆にもこう言った。「師よ、あなたは救い主です。どうか私の命をお救いください」タクールはカリバダに舌を出すように言ってマントラを書いた。それでもカリバダは満足せず、「私がこの世を去るとき、あなたが救世主となつて、左手に光を、右手に私をもつて連れて行ってください」と言うと、タクールは、「お前の願いを叶えてあげるよ」と慈悲深い声で答えられた。その言葉通り、カリバダが息を引き取るとき、右手を上げたのだった。